

平成 21 年 6 月 5 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2006-2008

課題番号：18720067

研究課題名（和文） 女性小説家と愛国主義の創作—19 世紀英国小説を中心に

研究課題名（英文） Patriotism as Envisioned by Women Writers: The Novel in Nineteenth-Century Britain and Ireland

研究代表者

吉野 由利 (Yoshino Yuri)

一橋大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：70377050

研究成果の概要：

19 世紀前半の英国とアイルランドの小説における「愛国主義」の概念化とそれを取り巻く言説の関係の、一層明確な展望と具体的な特性記述を通し、そこに内在する理念を提出した。そのため主要小説における愛国者と他者の表象の特徴を、大英帝国の文壇と「ケルト辺境」、フランス、地中海世界、「オリエント」を結びつけ交錯する文化・政治言説のネットワークの中に位置づけ、さらに、小説の制度化に果たした Frances Burney (1752-1840), Maria Edgeworth (1767-1849), Jane Austen (1775-1817)らの貢献を再評価した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,600,000	0	1,600,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	240,000	3,740,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：イギリス文学、アイルランド文学、19 世紀小説、女性作家、愛国主義、patriotism

1. 研究開始当初の背景

女性文学者による「愛国主義」(patriotism)の概念形成は、国内外の英文学研究において昨今興味を喚起している研究対象である。しかしながら、発展途上の分野で先行研究の層は薄く、関連言説との相対関係の広い鳥瞰図は

未だ不明瞭にされている部分が多い。たとえば、「英国民形成」現象が進行したとされる 19 世紀初頭前後に傑出した Burney, Edgeworth, Austen の作品においても「愛国主義」のあり方は提示・示唆されているが、それに着目した批評は各作家研究の枠内に留

まるものが殆どである。この概念に関連した、三者の作品を中心とする同時代の小説間の間テキスト性、及び同時代の他言説との間テキスト性まで視野に入れ、それらに共通して内在する理念の析出を目指す、包括的な研究が待たれている。

2. 研究の目的

(1)19 世紀前半の英国小説における「愛国主義」の概念化とそれを取り巻く言説の関係の、一層明確な展望と具体的な特性記述を提出し、その内在理念を析出すること。

(2)昨今の小説研究の主流となっている作品のイデオロギー分析の手法を補完するようなアプローチを考案すること。

3. 研究の方法

(1) 対象作家の焦点は、Burney, Edgeworth, Austen である。長期間フランスに在住した Burney の「アングロ・フレンチ」の視野、Edgeworth の「アングロ・アイリッシュ」の視野、Austen の「イングランド中心」の視野、から構想される「愛国主義」は、それぞれ微妙に角度を違える国際意識に基づき、相互に有益な比較材料を提供する。三者が執筆した当時の欧州では、啓蒙主義コスモポリタン思想からナショナリズムへのイデオロギー変遷が進行したとされる。本研究は、各作品で示唆・提示される「愛国主義」が、その趨勢に対しどのような反響を示しているか手がかりにその内在理念を探る。

(2) 各小説のテーマ分析では、どのような登場人物が理想の愛国者として、あるいは他者として表象されているか、特にジェンダー役割、階級、言語に関する側面を考察する。テーマ次元において理想とされている「愛国主

義」が、テキストによって一貫性をもって発信されているかに関しては、語りの装置、特に語りの「声」の態の分析を通して行う。

(3) 同時代の男性小説家による「正典的な」作品との比較を行なう。その際差異を析出するには、各作品が「歴史」とどのような関係を結んでいるのか考察することが重要である。従って、同時代に「歴史小説」のジャンルを確立した Walter Scott (1771-1832)の作品との比較を行う。また、知名度は低いものの、「年代記」や「歴史」の体裁を取る、同じくスコットランドの作家 John Galt (1779-1839)の小説も関連性が高いので、比較材料とする。

(4) 当時の「愛国者」をテーマにするパンフレットや文学作品を概観し、研究対象のテキストを取り巻く政治・文学言説のサンプル抽出とその分析を行った。また、Austen, Burney, Edgeworth の作品が理想の愛国者として描く登場人物は、しばしば多言語能力を体現することから、辞書、語学教育書、教育論（子どもや女性の教育に関するもの、男性の専門教育に関するもの）などの一次資料も調査した。

(5) 未刊行の手稿や、刊行されていても国内では入手もしくは閲覧不可能な 18～19 世紀版のテキストを広く調査する必要があるため、大英図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館、スコットランド国立図書館、アイルランド国立図書館、ニューヨーク公立図書館、モーガン図書館、イェール大学バイネキ図書館等で資料調査を行う。あわせてデータベースを活用する。

(6) 科研費基盤研究 B 「18 世紀イギリスにおける女性の言説と公共圏—文学研究と歴史研究の断層と結節点」(平成 19 年度～21 年度)の研究分担を通し、Burney, Austen, Edgeworth

ら女性小説家と「公共圏」という概念の関係について、理論的かつ歴史的な理解を深める。

4. 研究成果

(1) Burney, Edgeworth, Austen らの作品において、各作家が理想の愛国者像に許容する文化的柔軟性には程度の違いがあり、それは各作家のジェンダーや階級の問題に対する観点と結びついていること、さらにそれらに通底して内在する共通理念とは、イングランド文化を標準としながらも支配層は文化的に柔軟な愛国者でなければならないとする連合王国のあり方の模索であることが、明らかになった。

(2)各作品で理想的な愛国者を体現するモデルとして提示されるのは地主のみならず専門職業人の登場人物である。特に多言語・多文化理解を必須とする専門教育がイングランド文化を標準としながらも文化的に柔軟な愛国者を創出するシステムとして注目されている。

(3)上記(1)に関連し、各作家が例示する連合王国の女性の規範的な女性らしさと文化的な柔軟性の間には緊張関係が観察できた。特に Edgeworth の作品世界では、女性愛国者のモデルに、男性愛国者のモデルに付与されたほどの文化的柔軟性が許されておらず、それは上記(2)で触れた専門教育の機会が女性に閉ざされている事と結び付けられている。

(4)上記(3)のような作品構成は、女性小説家が愛国主義を例示するという行為に矛盾したものと考えられる。しかし、特に Burney や Edgeworth の作品に顕著であるように、イングランド文化を標準としながらも文化的に柔軟な女性の語り手像を構築することによ

り、語りの行為というパフォーマンスでその矛盾の緩和もしくは解消が試みられている。このような語りのモードの洗練は、小説技法への重要な貢献となっているといえる。

(5)昨今の小説研究で主流となっている作品の政治的な解釈あるいはイデオロギー分析は、テーマ、人物造型、プロットの分析を偏重し、小説技法を看過しがちである。上記(4)の考察は、そのような不備を補完しうる方法論や視点を提案しているといえる。

(6) 文化的に柔軟な愛国者というテーマは、Scott の小説でも引き継がれていることが確認された。Scott の歴史小説シリーズは、それまで準文学ジャンルとして軽視されてきた小説が文芸ジャンルとして認められるようになった契機をもたらしたという Ina Ferris の先行研究を踏まえ、Burney, Edgeworth, Austen らの問題意識と創作活動が、英国・アイルランドにおける小説の制度化という広い文脈においても重要である、ひいては上述の内在理念と密接に関わる、と結論づけられた。

(7) 愛国主義のあり方を描く小説は、文化的に排他的と思われがちである。しかし、本研究の対象作品の中に、当時の英国の文壇、「ケルト辺境」、フランス、地中海世界、中東、南アジアを結び交錯する複雑な文化・政治言説のネットワークに内在する理念の一端を検証できたことは意義深い。

(8) 上記(6)と(7)の考察と関連し、英国・アイルランドの文学史観（特に顕著にあらわれるのは小説起源論）の傾向は西欧のプロテスタント的価値と結びついたリアリズムを19世紀小説評価の規範とするところにあり、それ

は相対化されねばならないとの Joe Cleary と Margaret Kelleher の重要な指摘は、ここでも確認され、しかも、その必要性は彼らが想定した時代以前に遡る必要があることが確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

① 吉野由利 「アイルランドからインドへ」、『英語青年』153 巻 11 号, pp. 687-688, 2008. 2, 査読無

② 吉野由利 「Big House 再建と Celtic Tiger」、『英語青年』153 巻 8 号, pp. 496-497, 2007. 11, 査読無

③ 吉野由利 「‘The Irish Romanticism’再定義」、『英語青年』153 巻 5 号, p. 272, 2007. 8, 査読無

④ 吉野由利 「アイルランド小説批評の挑戦」、『英語青年』153 巻 2 号, p. 104, 2007. 5, 査読無

⑤ Yuri Yoshino, “The Big House Novel” and Recent Irish Literary Criticism’, *Journal of Irish Studies*, 22, pp. 48-54, 2007, 査読有

[学会発表] (計 4 件)

① 吉野由利 「ケルト辺境のシェヘラザード?—オリエント表象と national tale の展開」 日本英文学会全国大会シンポジウム、2009 年 5 月 30 日 東京大学

② 吉野由利 「Edgeworth と Owenson の作品におけるアイルランド表象とオリエント表象の交錯」 スチュアート朝研究会例会シンポジウム、2009 年 3 月 28 日 専修大学

③ 吉野由利 「女性の越境と愛国心—連合王国の内と外」 日本英文学会関東支部例会シンポジウム、2009 年 1 月 10 日 青山学院大学

④ Yuri Yoshino “The Taming of “The Wild Irish Boy”: Nation, Class, Gender in Maria Edgeworth’s *Ormond*” Wild Irish Girls Conference, 20th July 2006, Chawton House Library, U.K.

(参考) International Association for the

Studies of Irish Literature 2009 年度大会に発表予定 (2009 年 7 月 27 日~31 日グラスゴー大学)

[図書] (計 4 件)

① 吉野由利 「ジェンダーとネイションの再構築—マライア・エッジワース『ベリンダ』(1801)」 中野知律・越智博美編、明石書店『ジェンダーから世界を読むII』、2008 年、pp. 177-197.

② 吉野由利 「小説、ネイション、歴史—マライア・エッジワースとウォルター・スコット」 鈴木美津子・玉田佳子・五幣久恵・吉野由利、英宝社、『女性作家の小説サブジャンルへの貢献と挑戦』2008 年、pp.67-104.

③ 吉野由利 「サンディトン」 内田能嗣・塩谷清人編、世界思想社『ジェイン・オースティンを学ぶ人のために』2007 年、pp.256-264.

④ 吉野由利 「18 世紀イギリスに流行した学生による定期刊行物」 ユーリカ・プレス、向井秀忠編『復刻版「ロイタラー」1789-1790 別冊日本語解説』、2007 年、pp. 45-71.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉野 由利 (Yoshino Yuri)

一橋大学・大学院法学研究科・准教授

研究者番号：70377050

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者